慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	幸若舞曲『敦盛』の成立
Sub Title	The creation of Kowaka-mai "Atsumori"
Author	佐谷, 眞木人(Saya, Makito)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.69, (1995. 12) ,p.22- 39
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00690001-0022

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

幸若舞曲『敦盛』の成立

佐谷眞木人

一

幸若舞曲『敦盛』は、一の谷合戦に於て熊谷直実が平敦盛を討った逸話を題材にした作品である。本作品の成立に関しては『平家物語』を典拠とするものの、読み本系・語り本系双方の影響が認められる点や、独自の内容を多く含む点など込み入った事情が推測され、今日まで研究がなされてきているものの、なお検討の余地が残されていると思われる。本稿の目的は、その複雑な成立事情の一端を解明することにある。

そこでまず、本作品の成立に関するこれまでの諸論を概観しておきたい。佐々木八郎は『増補平家物語の研究』において「物語の筋においては大方『平家』の本文―殊に延慶本の如き本文を踏襲しつつその内容においては八坂本の如き文章をもって改廃添加と修飾とが企てられている」[1]と指摘している。この佐々木の指摘は早い時期のものながら、『平家物語』との関係に限定するならば今日なお有効性を持っているといえよう。これに対して大山修平は逆に語り本との関係を重視し、「この「敦盛」全体の本文は八坂系統の「語り本」を土台にしたうえで、書状の部分だけは延慶本あるいは

長門本の類のものを参考にして採り入れたのではなかろうか[2]」と指摘し、更に鎌倉本あるいは百二十句本が単独で典拠となった可能性をも指摘している。また麻原美子は「前半は略本系と関係深く、後半は広本系を中心とした筋立て[3]」であると指摘している。

以上の諸論を踏まえつつ、『平家物語』諸本と幸若舞曲の本文を詳細に比較・検討したのは荒木繁と岩瀬博であった。荒木は平凡社東洋文庫『幸若舞』3「解題」において、両者の構成を比較し、敦盛が討たれる前に名乗ることや、遺品の四季の帳の有無、形見送り説話の有無、熊谷の発心入道説話の有無などの諸点の一致から「幸若「敦盛」は、『平家』諸本のうち延慶本ともっとも近い関係にある[4]」との結論を導いている。但し荒木は延慶本単独典拠説を唱えているのではなく、幸若に『平家』諸本には見られない高野山の描写などが含まれることから、『平家』の原流となった高野聖の唱導が幸若に現れている可能性をも示唆している。

一方、岩瀬博は敦盛の遺品の四季の帳や、熊谷直実の送り状の本文を『平家物語』諸本との間で詳細に比較し、四季の帳に関しては延慶本と一致する箇所が最も多いものの、部分的には長門本や闘争録に近い箇所も認められること、また送り状に関しては現存するどのテキストに近いとも言えないことを指摘している。そして「幸若舞曲が拠ったと言える現存テキストは見当らない」と結論づけ、「幸若舞曲の構想は別に平家物語テキストに拠らずとも、幸若大夫の既習知識で建てられる体のもので、その表現も彼らの耳袋にあった文言で綴る可能性」があり、「特定のテキストにこだわり、その依拠本を求める態度は、脱却する必要があろう[5]」と述べている。

以上をまとめてみると、岩瀬の説には首肯し得る点も多いが、現存『平家』諸本との関係においてやや慎重に過ぎるのではないかと思われる。確かに『平家』諸本の中には、幸若と完全に詞章が一致するものは見当らない。しかし、幸

若成立後の伝承過程における詞章の変化や誤脱等の問題を考え合わせるならば、むしろあまり細部の異同にこだわる必要はないのではないか。現存する幸若の本文が、成立時の姿をそのまま留めているとは考えにくく、むしろ幾多の改変を経ていると考えた方が自然であろう。その上で幸若が『平家』を典拠として作られていることが明らかである以上、やはり現存する『平家』諸本を手掛りに、幸若がどのテキストに比較的近いかを考えていく必要がある。

そのような点から言って、全体の構成においては幸若は延慶本に最も近いというのは、大山氏を除く諸氏のほぼ一致する見解であると思われる。但し、幸若の内容からいって、延慶本が単独で典拠になったと考えるには無理があり、やはり語り本の部分的な影響は認める必要があるように思われる。また、古伝承や唱導の影響という面についても、典拠の不明な内容を全て古い伝承に基いたものであるとするような愚は避けねばならないが、やはり慎重に検討を加える必要がある。

二

さて、以上のように一応の整理をした上で、以下に幸若と『平家物語』諸本との関係に関する若干の私見を述べてみたい。

全体の構成については既に諸氏の論に詳しいので、ここではまず、敦盛の遺品の笛と篳篥について考えてみたい。幸若は、敦盛が笛と篳篥を携帯していたとするが、これは『平家』のどのテキストとも一致しない幸若独自の設定である。『平家』の諸本のうち、敦盛の持っていた楽器を篳篥とするものは延慶本、長門本、闘争録の三本のみであり、残りは笛を所持していたとしている。笛であれ篳篥であれ、合戦の場に楽器を携行していたという設定がこの場では重要なの

であり、それが例えば覚一本における直実の詞「當時みかたに東国の勢なん万騎かあるらめども、いくさの陣へ笛持つ人はよもあらじ。上臈は猶もやさしかりけり」[6]といった表現に結び付くのである。従ってここでは合戦に必要のない楽器を持っていることに焦点が当てられているのであって、それが笛なのか篳篥なのかは本質的な差ではない。

しかし、幸若の描くように敦盛が笛と篳篥の両方を持っている必然性は、全くないと言えよう。ストーリー展開の上からは、どちらか一方で事足りる筈である。この記述について荒木繁は「幸若は、敦盛の遺品を篳篥とする古態をとどめながら、一方で室町時代の平曲がこれを笛とする大勢も無視しがたく、篳篥と笛を携えていたとする折衷的態度に出たのではなかろうか」[7]と指摘している。

確かに、幸若の「紫檀の家に篳篥を入れて指されたり」とする記述は、『平家』の延慶本や長門本の記述と一致している。また、「小枝」という名の笛を携えていたとする記述は『平家』の語り本と一致している。ここには『平家』の読み本、語り本双方の影響が最も端的に現れていると言ってよい。しかし、笛に関する記述をやや詳しく見ていくと、幸若には『平家』にない記述が付加されていることに気付く。幸若では、敦盛の遺品の笛を見た義経が以下の如く述懐している。

あら、不思議や。この笛は、某が見知るところの候。それをいかにと申に、一年、高倉の宮、御謀叛企ての時、天下に、小枝、蟬折とて、二管笛あり。蟬折をば、三井寺にて、弥勒に回向し給へり。小枝をば、御最後迄持たせ給ふ由、承るが、討たれさせ給ひし時、此笛、平家の手に渡る。一門の其中に、笛に器用を召されしに、弱冠なれども、敦盛は、笛の器用の人也とて、下されけると承る。今朝一の谷の内裏役所にて、笛の遠音の聞えしは、此人の吹きけ

るか。[8]

右の引用から明らかなように、敦盛の所持していた笛はもと高倉宮以仁王のものであったと幸若はしているが、このような記述は『平家』の諸本には見当らない。百二十句本、覚一本、八坂本等は笛の由来を記すが、それは鳥羽院から忠盛が相伝したという内容であって、高倉宮の笛との関連は示されていないのである。しかし、その一方で高倉宮が小枝、蟬折の二管の笛を持っていたとする記述は『平家』諸本に共通して見られるものであり、高倉宮と敦盛の笛の名が共に「小枝」となっていることは『平家』語り本の抱える内部矛盾であるという点は、以前に指摘したことがある。[9] したがって幸若の作者は『平家』語り本においては二場面に「小枝」という同一の笛の名が見えることに気付いており、その矛盾を回避すべく高倉宮から敦盛へという新たな説話を創作したと考えられるのである。[10]

また、先に引用した義経の詞の中で、「今朝一の谷の内裏役所にて、笛の遠音の聞えしは」とある部分は、覚一本に見える熊谷直実の詞「あないとおし、この暁城のうちにて管絃し給ひつるは、この人々にておはしけり」等の語り本の叙述を参考にしたものと考えられる。（類似する叙述は延慶本・長門本等には見えない）

次に、幸若の本文が語り本の中では明らかに八坂本に近いことがわかる箇所を指摘しておきたい。敦盛を討とうとした熊谷が、我が子小次郎直家が手傷を負ったことを回想する場面である。

（幸若）

今朝一の谷の大手にて、敵まれいの三郎が放つ矢を、直家が弓手の腕に受け留め、某に向かつて、「矢抜いてたべ」と

申せしを、「痛手か、薄手か」と問ばやと思ひしが、いや〳〵、熊谷ほどの弓取が、敵味方の目の前にて、問ふべきかと思ひ、はつたと睨んで、「あら、言いに甲斐なの直家や。其手が大事ならば、そこにて腹切れ。又薄手にてあるならば、敵と合ふて討死をせよ。味方の陣を枕とし、私の党の名ばし朽すな」と言ひてあれば、まことぞと思ひ、某が方を、たゞ一目見、敵の陣へ駆け入りてよりその後、又二目とも見ざりしなり。

（覚一本）

小次郎がうす手負たるをだに、直実は心ぐるしうこそ思ふに、

（八坂本）

けさ一の谷の西の城戸へ寄たりつるに、小次郎が妻手の小肘を篦ぶかに射させて、「矢ぬいてたべ」と云ぬるを、「不覚仁かな、今しばしこらへよ」とて、ぬかざりつるが、其後大勢にをし隔られて死生をしらず。[11]

延慶本、長門本、闘争録、百二十句本には類似の記述は見出せない。幸若の記述は大幅に増補されているものの、小次郎が「矢抜いてたべ」[12]と言うあたりなど、八坂本を基にしていると判断して、ほぼ間違いないのではないか。

以上の例は全体のごく一部ではあるが、幸若の作者が『平家』の読み本、語り本双方を参照していることを明瞭に示していよう。幸若の本文は、延慶本に近い読み本と、八坂本に近い語り本の、少くとも二種以上の『平家』の本文をつき合わせ、できるだけ相方に矛盾を生じないように再構成されたものであり、更にその上に大巾な加筆、修正が施され

ていると考えられる。部分的には延慶本に近く、また、部分的には八坂本に近く、一部には両方の要素を兼ね備えている本文の成立は、そのように考えなければ説明がつかない。但し、岩瀬が前掲論文の「四季の帳」の比較において指摘したように、幸若の本文には部分的に長門本に近い箇所が散見する。この問題を考え合わせるならば、幸若の基にした『平家』の一本は、現存する延慶本と長門本の混態的な本文であった可能性もある。これは延慶本や長門本の成立に関する問題でもあり、なお今後の検討課題とするべきであろう。

さて、以上によりに幸若と『平家』との関係を整理するならば、それは前述の佐々木の指摘を大きく逸脱するものではなく、むしろその確認に留まってしまったようである。しかし、幸若のオリジナリティーは『平家』と内容上重ならない部分にこそ存在する。以下にその部分に対する検討を加えつつ、幸若の成立の問題について考えてみたい。

三

そこで、以下に幸若独自の内容について、検討を加えてみたい。細かな表現上の異同についてはひとまず無視することとして、内容上明らかに『平家』にはない記述（人名・地名・客観的事実等に関するもの）を以下に列挙する。

a、敦盛は忘れた笛を取りに帰ったため、平家一門の御座船に乗り遅れてしまう。

b、敦盛は塩屋の端をめざして落ちて行く。

c、敦盛は沖の船を扇で招く。門脇中納言（平教盛）が気付き、船を岸へ寄せようとするが、折からの強風のために寄せることができない。

d、敦盛は馬を泳がせて船に近づこうとするが、若武者のため騎乗が下手で、手綱にすがりついてしまうため、馬は進

むことができない。

e、熊谷は岸から敦盛に対して、もし引き返さなければ矢を射かけると言う。

f、敦盛は熊谷に向って歌を詠みかける。「梓弓矢をさし矧げて引く時は返す事をば知るかぞも君」

g、熊谷が返歌を詠む。「平題箭（いたつき）のはや外れんと思ひしにやと言ふ声に立ちぞ留まる」

h、熊谷が敦盛を逃がそうとした時、周囲を取り囲んでいた源氏の軍勢は、目賀田、馬淵、伊庭、三井、成田、平山、上肥の勢と更に義経主従であった。

i、敦盛の北の方は、按察使大納言資賢の女であった。二人は仁和寺御室の御所で月次の管弦のあった時、敦盛が笛を、姫君が琴をそれぞれ演奏したことがきっかけで知り合った。

j、敦盛の笛は、もと高倉宮が所持していたものであった。

k、熊谷は義経から勧賞として武蔵国長井の庄を賜る。熊谷は、「人となり人となればやとぞ思ふ。さらずはつゐに墨染の袖」の歌を詠んで、出家の決意を示す。

l、熊谷は塩屋の端に下り、敦盛の死骸と遺品とを八島に送る。

m、平家方では基国が、敦盛の死骸と遺品とを受け取る。

n、熊谷は敦盛の首を、都の獄門から盗み取って供養する。

o、熊谷は出家したのち高野山に敦盛の遺骨を納め、蓮華谷の傍らに知識院という庵室を結ぶ。

大きな異同だけを挙げても、以上十五箇所に及んでいる。そのほとんどは『平家』には見えない逸話であり、幸若がいかに大巾な増補を行っているかが理解されよう。その内容については、全体的な傾向として、説明的になっていると

いう点を指摘し得る。a、c、d、hなどはその代表的なものである。「なぜ、敦盛は船に乗り遅れたのか?」「なぜ、沖の船は岸へ近づくことができなかったのか?」「なぜ、敦盛は馬を泳がせて沖の船にたどり着くことができなかったのか?」このような素朴な疑問に対して、『平家』は全く答えない。例えば覚一本巻第九「敦盛最期」の冒頭部には以下のように記されている。

いくさやぶれにければ、熊谷次郎直実、「平家の君達たすけ船にのらんと、汀の方へぞ落ち給らん。あはれ、よからう大将軍にくまばや」とて、磯の方へあゆまするところに、(中略)連銭葦毛なる馬に黄覆輪の鞍をいてのッたる武者一騎、沖なる舟にめをかけて、海へざッとうち入れ、五六段ばかりおよがせたるを、熊谷「あれは大将軍とこそ見まいらせ候へ。まさなうも敵にうしろをみせさせ給ふものかな。かへさせ給へ」と扇をあげてまねきければ、招かれてとッてかへす。

右の引用から明らかなように、ここで説明されているのは合戦が終ろうとしているにもかかわらず大将軍と組む機会を得ず、なんとか平家の君達を討ちとって功名をあげたいと焦る熊谷の心理だけである。敦盛がなぜ、そこに居合せたのかという経緯は一切、語られていない。『平家』においては敦盛は、偶然熊谷に出会って討たれる、弱々しい、哀れな若武者としての役割が与えられているだけであり、それ以上のものではないのである。それは本話が、『平家』においては基本的には熊谷説話として、熊谷がなぜ出家を思い立ったのかという主題において語られているからだ。そこでは敦盛は、結局のところ熊谷の出家の契機となるための副次的な存在でしかない。

それに対して、幸若舞曲における敦盛の描写は、『平家』に比べて格段に詳しくなっている。幸若では敦盛は、単に討たれるだけの存在ではなく、さまざまな表情が肉付けされているのである。例えばdにはそれが最もよく表れている。

いたはしや敦盛。老武者にてましまさば、三頭に乗り下って、時〳〵声を立て給はば、御馬は逸物なり、沖の御座船に難なく馬は着くべきに、若武者の悲しさは、馬に離れて叶はじと、思し召されける間、前嵩に乗り懸て、左右の鐙を強く踏み、手綱に縋り給ひて、浮きぬ沈みぬ泳がせらるゝ。馬逸物とは申せ共、畳む波に塞かれつゝ、泳ぎかねてぞ見えにける。

このような表現は、前述したように「なぜ敦盛は逃げ遅れたのか」という『平家』の読者が持つであろう疑問に答えるべく用意されているのであるが、その描写は詳細で、また現実的であり、読者を納得させるだけの十分な力を持っていると言えよう。したがって、『平家』から幸若への展開の過程で、描写の力点は明らかに熊谷中心のものから、熊谷・敦盛が対等なものへと移ってきているのである。それは敦盛の熊谷に討たれる客体として単に弱々しいだけの存在からの脱却を意味する。このような描写の延長線上に、例えばfに見られるような、熊谷に対して歌を詠みかけ、果敢に挑んで行く敦盛の姿勢が現れてくるのである。

更に、この逸話からは荒々しい合戦の場においても和歌を詠むような、教養ある優雅な貴公子としての敦盛像という指向性が窺えよう。したがってその敦盛に対して返歌を詠む熊谷もまた同様に、東国の荒武者でありながら風雅を解する心をも持っている人物になるのであり、敦盛像の変容は熊谷像にも微妙な陰影を投げ掛けずにはいないのである。

このようにして、いわば敦盛の人間的成長の跡が見られるのが幸若の特徴であった。幸若は『平家』と同様、全体を熊谷の発心譚としてまとめるという大枠は崩していないものの、同時に悲劇的英雄としての敦盛を描くという主題をも持ち合わせているのである。

そしてそのように敦盛の人格が形作られていく過程で最も重視されたのは、敦盛の遺品の中でも代表的な存在であった笛なのである。幸若独自の内容には笛に関する逸話が多く含まれている。例えばaでは「御運の末の悲しさは、漢竹の横笛を大裡に忘れさせ給ひ、若上臈の悲しさは、捨てても御出であるならば、さまでの事のあるまじきを、且うは、この笛を忘れたらんずる事を、一門の名折りと思し召し、取りに帰らせ給ひて、かなたこなたの時刻にはや御一門の御座船を、遙かの沖へ押し出す。」とあって、敦盛が熊谷に討たれることになったそもそもの原因は笛によって作られたことになっているし、また、iにおいては敦盛と北の方との出会いを、「仁和寺御室の御所にて、月次の管絃の有り時、敦盛は笛の役、同じ楽工にて、琴弾き給ひし御姿を、一目見しより恋と成て」と、管絃の席で知り合ったとしている。幸若では敦盛の運命は、ほとんど笛によって支配されていると言っても過言ではない。幸若が敦盛の北の方を「按察使の大納言資賢の卿の姫君」としている事についても、源資賢は『平家』にも名の見える後白河院の近臣であり、[13] 今様の名手であったと伝えられる人物であることを考え合わせるならば、一連の笛に関する説話を増補していくという方向の中で行なわれた作為ではなかったかと推測される。jにおいて笛の由来が、『平家』に見える高倉宮の説話を摂取する形になっていることは既に指摘したとおりであるが、その由来を義経が語ることによって、笛の権威づけがなされている点にも注意しておく必要がある。

以上のように幸若では、敦盛は笛と篳篥の両方を携えていたことになっているものの、実際には笛だけが圧倒的に重

視されているのである。そこには『平家』の語り本に見えるような笛の名手であったという敦盛像を大きく展開させることによって、新たに貴公子としての敦盛像を作り上げていこうとする創作態度を確認することができよう。

四

さて、以上のような幸若にあって『平家』に見えない表現が幸若のオリジナリティーを支えているとすれば、逆に『平家』にあって幸若に見えない記述にも同様の意味で注意を払う必要があるだろう。幸若では、敦盛の遺品の笛が義経の見参に入れられた後、どうなったかが記されていない。熊谷が敦盛の父経盛に送った形見の中には含まれていないのであるが、それは『平家』と大きく異っている。『平家』の諸本のうち、熊谷から平経盛への形見送り説話を含む、延慶本、長門本、百二十句本、源平盛衰記について以下に該当部分を見てみると、

（延慶本）

真實余ニ哀ニ覚テ、敦盛ノ頸ヲ彼直垂二ツヽミテ、篳篥ト巻物トヲ取具テ、御孝養有ヘシトテ状ヲ書ソヘテ、屋島ヘ奉送。

（長門本）

熊谷は見し俤のみ身にそひて、わすれかたさそまさりける。此くひをわくらはやとはおもへとも、わたくしの物になし、せめて思のあまりにや、めされたりける御ひたゝれに、むなしき死骸ををし巻、かの篳篥さしそへて、雑色二人

水手二人そへて、つり船にのせ、屋嶋のいそへそをくりける。[14]

（百二十句本）

（くまがへは）あまりのおもひのかなしさに、あつもりの御かたみ、おきなる御ふねにたてまつらばやとて、さいごのときめされたる御いしやう、よろひいげのひやうぐども一ツものこさず、御ふえまでもとりそへて、ちうじやうをかきそへ、つかひにうけとらせて、せうせん一そうしたてゝ、御ふねしゆりの大夫殿へたてまつりけり。[15]

（源平盛衰記）

熊谷次郎直實ハ、（中略）是程に若ク嚴シキ上臈を失歎給フラン、父母ノ心ノ中コソ糸惜ケレ、縦勲功之賞ニハ不預共、此頸遺物返送、今一度替レル貝ヲモ奉見ハヤト思ケレハ、實檢ニモ合セ、懸頸ニモシタリケレ共、大将軍ニ申請テ馬、鞍、冑、甲、弓矢、漢竹ノ笛、一モ取落サス一紙ノ消息状ニ相具メ、敦盛ノ首ヲハ父修理大夫ヘソ送リケル[16]

以上から明らかなように、『平家』の主要な諸本のうち、形見送り説話を持つものは全て、遺品の笛或いは篳篥を、熊谷が経盛のもとに送り届けたとしている。これは笛や篳篥の敦盛の遺品の中での重要性を考え合わせれば当然の処置だろう。長門本では更に、遺品の送り届けられた八島の様子を「御母、北方一所にさしつとひてむなしき死骸を中にをき、件篳篥をあなたこなたへとりわたし、こはされは夢かや〳〵とて、たゝなくより外の事そなき」と記している。

これに対して幸若は、笛又は篳篥が経盛のもとに届けられたとする記述を欠いている。例えば、死骸を送り届けた熊

谷の使いの者は「御死骸に色〳〵の武具共、又は進状を相添へ、是迄送り申て候。」と言っているし、基国が受け取る場面でも「送りの船に、我が船を押し寄せ、長刀を杖につき、送りの船をさし俯ひて見て有ければ、げにと色〳〵の縫物したる直垂に、敦盛の御死骸と覚しきを、押し包みてぞ置きにける。紫裾濃の御着背長、黄金作りの御佩刀、十六差いたる染羽の矢。村重藤の弓もあり。紛ふところはましまさず。」とあって笛にも篳篥にも触れていない。これは幸若が前半部において笛に関する逸話を大巾に増補していることを考え合わせるならば、些か奇異な印象を受ける。敦盛の笛はどこへ行ってしまったのだろうか。

この問題を解く上で参考になると思われるのは、幸若が具体的な地名に触れている点である。前に挙げた幸若独自の内容のうち、b.とl.に見える「塩屋の端」という地名について考えてみたい。ここでの「塩屋」は、現神戸市垂水区の塩屋を指すものと思われる。一の谷より西に当り、敦盛が西に向って落ちようとしたことがわかる。幸若では経盛が、「あら無残や、敦盛。一の谷を出し時、故郷の方を見送り、心細げにて立たりしを」と述懐していることから、敦盛が一の谷を出発したのは明らかなので、討たれたのは一の谷・塩屋間の海岸ということになる。『平家』諸本には敦盛の討たれた場所を特定し得る記事は一切見られない。そして、この幸若の記述は三の谷の西、旧摂津播磨国境の境川の東岸に敦盛終焉の地と伝えられる敦盛塔が現存することと符号するのである。

件の石塔がいつ頃から彼の地に建っているのかは判然としないが、徳田和夫氏は室町末期頃制作された「須磨寺参詣曼荼羅」に、敦盛塔とおぼしき石塔が描かれていることを指摘している。[17] また、文禄元年（一五九二）、当時常陸・下野の大名であった佐竹義宣の家臣平塚滝俊は、朝鮮出兵のために赴した肥前名護屋から国元に宛てて書状を送っているが、その中にも須磨を通った際に敦盛の石塔を見物したとする記述が見える。[18] 現在までのところ、敦盛塔に関しては室町時

代中期以前に溯る記録を見出していないが、現存する幸若舞曲の本文が須磨近辺の敦盛伝承の影響を受けていることは明白であろう。

このように考えるならば、幸若の前半部に笛に関する逸話が多く語られ、後半部において形見送りの遺品の中に笛が含まれないのは何故か、という疑問が氷解する。敦盛の笛は熊谷の手から義経に渡されたあと、須磨の地に留め置かれたのであり、幸若もまたそれを前提としているのである。

神戸市須磨区の須磨寺（上野山福祥寺）に、敦盛の遺品と伝えられる笛が存在するのは周知の事実である。同寺の古記録『当山歴代』によると、応永三十四年（一四二七）には、敦盛の遺品と称する笛が既に存在していたようだ。[19] とするなら幸若が成立した時点で、「敦盛は三の谷の西の海岸で熊谷に討たれ、その遺品の笛は須磨寺に現存する」という伝承が、半ば「歴史的事実」として巷間に流布しており、幸若の作者もまたそのような「事実」を避けて通ることはできなかったのではないか。

幸若が明らかに『平家』以外の伝承の影響を受けていることが認められる部分は、もう一箇所ある。それは前記Oに示した熊谷が高野山に登る結末部分である。以下にその一部を引用すると、「（熊谷は）いよ〳〵念仏申、奥の院へ参り、敦盛の御骨と篭め置き、蓮花谷の傍らに、知識院と申庵室を結び、峰の花を手折り、閼伽の水を掬び、行ひすまし、蓮生八十三と申に、大往生を遂げにけり。」とあって、熊谷が敦盛の遺骨を高野山奥の院に納めたことや、知識院という庵を結んだことなど『平家』の諸本には見えない記事を含んでいる。これらの記事もまた、『平家』とは別の伝承の影響下にある可能性が強い。

この記事に関しては、須磨寺に蔵される『須磨寺笛之遺記』に同様の記述が見られることを指摘しておきたい。熊谷

が高野山に登る部分には以下のようにある。

案内者（引用者注、明遍僧都）の先達賜て、奥院にそ参ける。（中略）願ハ真実蓮生か凡夫悪心の罪障を翻して、六根清浄の善処に到しめ給へ。別しては敦盛の聖霊蓮心自他怨憎の罪根を除て、一仏浄土に導き給へと、泪と共に廻向して、御骨を御堂に納、自身蓮生が剃髪をも奉納、御経よミ念仏してそ蓮花谷に下向しける。（中略）則其辺に草蘆を結ひ、四句の初の文に付て知識院と名く。今の知識院是也。[20]

同書を翻刻した後藤康宏氏は、同書の成立を少くとも慶長十五年（一六一〇）以前と推定されている。但し、敦盛の笛の伝来に関する同書の記述は幸若と全く異っており、また表現の上からも同書と幸若との間に直接の影響関係は認められない。

従って幸若は、須磨や高野山における熊谷・敦盛伝承の直接の影響下に創作されたというよりは、むしろ既に成立していた熊谷・敦盛伝承を部分的に取り込みながら作られた可能性が強いと考えられる。

以上に概観してきたように、幸若は『平家』の複数のテキストを基にしつつ、そこに他の伝承や独自の説話を付加することによって成り立っている。それは『平家』を時代の文脈において再編成する試みであり、時代の常識や嗜好に適った新たなドラマの創出であった。例えば須磨寺に蔵されている敦盛の笛について、直接には全く言及しないところに、そのような伝承の影響を受けつつも、一定の距離を取ろうとする幸若の作者の姿勢が表れている。そこに幸若という芸能のオリジナリティーが存在するのである。

注

(1) 佐々木八郎『増補平家物語の研究』(早稲田大学出版部　昭和四十二年　二部　三六〇頁)

(2) 大山修平「『幸若舞曲』の研究(一)――『平家物語』との関連で――」(『金沢大学大学院文学研究科研究論集』昭和五十年九月)

(3) 麻原美子『幸若舞曲考』(新典社　昭和五十五年　四九八頁)

(4) 荒木繁「解題」(『幸若舞』3所収　平凡社　昭和五十八年　二七三頁)

(5) 岩瀬博『伝承文芸の研究』(三弥井書店　平成二年　四〇四―四〇七頁)

(6) 以下、覚一本の本文は、日本古典文学大系『平家物語』(岩波書店　昭和三十五年)に拠った。

(7) 荒木、前掲書

(8) 以下、幸若舞曲の本文は、新日本古典文学大系『舞の本』(岩波書店　平成六年)に拠った。なお、引用部分に関しては、諸本に大きな異同はない。

(9) 拙稿、「『平家物語』と笛――巻第九「敦盛最期」の形成をめぐって――」(『三田國文』第十三号　平成二年六月)

(10) この矛盾について『源平盛衰記』は、高倉宮の笛を蟬折のみとし、敦盛の笛を小枝とすることによって回避している。(前記(9)論文で指摘)

(11) 八坂本の本文は、山下宏明編『八坂本　平家物語』(大学堂書店　昭和五十六年)に拠った。なお、句読点、濁点を私に施した。

(12) 越前幸若系の諸本では、「手を負ひて候」となっている。

(13) 覚一本巻第二「大納言流罪」など

(14) 長門本の本文は『岡山大学本　平家物語二十巻』(福武書店　昭和五十二年)に拠った。(巻第十六)

(15) 百二十句本の本文は、高橋貞一校訂『平家物語　百二十句本』(思文閣　昭和四十八年)に拠った。なお、鎌倉本もほぼ同一の内容。

(16) 源平盛衰記の本文は『源平盛衰記』（慶長古活字版　勉誠社　昭和五十三年）に拠った。（巻第三十八）

(17) 徳田和夫「中世の目、中世の耳――社寺参詣曼荼羅の芸能素序章――」（『國文學』昭和六十二年六月）。なお、この問題については、以前の論稿で指摘したことがある。（拙稿、「御伽草子『小敦盛』の形成をめぐって」『三田國文』第十八号、平成五年六月）

(18) 岩沢愿彦「肥前名護屋図屏風について」（『日本歴史』二六〇　昭和四十五年一月）に翻刻、紹介。

(19) 『兵庫県史　史料篇』に拠る。

(20) 後藤康宏「『須磨寺笛之遺記』と『小枝の笛物語』をめぐって」（『伝承文学研究』第三十一号　昭和六十年五月）